大学山岳部と登山研修所の関わり

山　本　　篤（明治大学山岳部炉辺会）

高校一年生の時、好きだった渓流釣りのフィールドを広げようと、ワンダーフォーゲル部に入部、山登りを始めた私は、人生を変える一冊の本に出会いました。「処女峰アンナプルナ」、言わずと知れた1950年フランス隊による人類初の8,000メートル峰登頂の記録の物語です。これを読み、ヒマラヤ8,000メートル峰登頂を自らの人生の目標に定めた私は、大学の山岳部に入部し、その実現を目指そうとしました。

当時は現在のように個人でそのような機会を得ることは到底考えられず、そうすることしか選択肢がなかったということもありますが、何より私はこつこつと努力することが苦手で、無理やりにでも鍛えられなければ8,000メートル峰登頂などまさに夢のまた夢という思いがあったのです。私の明治大学山岳部入部は1982年４月ですから、高校時代を含めると実に40年近く大学山岳部というものを意識し、愛着を持って登山活動を継続してきたことになります。

当時の大学山岳部の一番の強み、長所は何かと尋ねられれば、入部時全くの初心者であっても、身体的資質にそれほど恵まれない者であっても、４年間の活動を経てどこに出しても恥ずかしくない立派な一人前の登山者になるということではなかったかと思います。そして、そこで養われた体力、山の中での生活力、精神面も含めた総合的な耐久力は、その後の各自の登山に大きく寄与し、また、実社会の中でも一人の社会人として社会貢献をする大きな礎となり、そのことこそが大学のクラブ活動の意義の根幹たるものであると考えています。

時代も大きく変わり、SNS等で知り合い、一度も顔を合わせることがないまま、それなりのリスクを伴う登山をする人たちまで出てきている今日、組織に属して山登りをすることの意義とは、第一に規律を学び、その重要性を認識することにあります。そして、私が明大山岳部時代、強く先輩方から言われてきたことは、スポーツとは（登山は一般のスポーツとは一線を画すものではありますが)、あくまでも人間のためのスポーツであり、決してスポーツのための人間であってはいけないということでした。これを登山に即して述べると、どんなに厳しい自然環境下においても、仲間への配慮を決して忘れず、すべての人たちにとって最も大事な人命の尊重ということを肝に銘じるということでした。さらに、一個人だけでなく、その他の仲間と非日常の厳しい環境下で登山をすることで、自らのみならず仲間が苦労する姿を見て、自然に対するより謙虚な気持ちがおのずと身に付くということもあるのではないでしょうか。もとより山登りとは、たった一つしかない命が簡単になくなってしまうかもしれない行為であり、このことはすべての登山者に常に持ち歩いてほしいと私は思っています。

一方で、大学山岳部には、毎年最上級生が卒業し４年ですべての部員が入れ替わってしまうという構造的な弱点があります。私が山岳部に入部した1980年代に、すでに大学山岳部は社会人山岳会に比して

斜陽だと言われていました。経験も実力も備えた者がリーダーとして何年も仲間を率いて登山をする社会人のクラブと比較して、上記のような構造的問題がある大学生との間に差ができてしまうのは当然のことであります。それを何とか埋めてきたのが大学山岳部の豊富な山行日数でした。私の入部した当時はどこの大学も年間の山行日数は最低でも70～80日程度あり、特に明治大学山岳部では、一つ一つの山行も長く、合宿だけで総山行日数が100日を超えることも珍しくありませんでした。長期の山行をすることの意義は、山の状況が良い時も悪い時も経験できることにあります。このことは、経験上、大変有意義なことであることは言うまでもありません。

1988年以降、30年に亘って登山研修所の研修会に関わってきた私は、数多くの学生と接してきました。初めて研修講師としてお招きいただいた頃の学生の印象は、皆、体力もそこそこの経験もあり、講師は山の中で指導すればよいという感じでした。しかし、現在は個人装備の点検に始まり入山の準備すべてを講師が一つ一つ丁寧に指導しています。この状況の主たる原因は、私は他でもない山行日数の減少であると思っています。大学山岳部の根幹を支えていた豊富な山行日数が減少してきたことは、大学山岳部の存在そのものを揺るがしかねないもので、現在の大学山岳部に共通するすべての課題に直結しているものです。

一昔前までは、学生のクラブ活動なので、あくまでも部生活も実際の登山も学生自治でやるべきとの風潮が多くのクラブにあり、過剰なコーチ、OBの介入はむしろ好ましくないものとみなされていました。それは、年間山行日数が100日もある当時の３～４年生であれば、そこに至るまでそれなりの経験を重ねることができ、安全な合宿運営がなんとか可能であったかもしれません。

しかし、一年の山行日数が50日に満たない大学がほとんどとなってしまった現在では、かつてのような学生自治によるクラブ活動はおのずと無理があるものと考えます。こうした現状を招いたものは、いったい何だったのでしょうか？私は、それは学生自治という建前の下に、経験も実力も学生より優位なコーチ、OBが、クラブ活動への適切な介入を怠った結果だと思っています。下界でいくら山のことについて指導しても、実際に山中で実技を示し、難しい状況判断をする姿を手本として示すことに勝るものはありません。今後はOB会が学生と一体となって、安全管理の面からも出来得る限り学生の山行に同行し、現場で指導することが不可欠なものであると考えます。

他方、学生は授業その他の理由でどうしても山行日数を確保することができないということであれば、その山行日数を埋める手立ては、トレーニング以外にありません。陸上競技でも野球でも柔道でも、他のクラブの部員は基本的に365日その競技のための練習を当たり前に行っています。山岳部の部員たちが週２～３日程度の練習でよい訳がありません。走って筋トレするのに、お金はかかりません。出来得る限り毎日部室に集まり、トレーニングを行うことで仲間意識を醸成し、クラブに愛着とプライドを持つことができるのではないかと考えます。以前から、山岳部では「山で強ければよい」また「山に登ることが一番良いトレーニングである」という考え方が言われていますが、私はそれに異議を唱えたいと思います。下界でのトレーニングにより身体的な資質が仮に10%向上したとします。そうすれば、現地山

において９割の力を発揮することで以前の100％の行動を行うことができるのです。私は、実際の登山は、あくまでも経験を重ね、厳しい判断を学ぶ場であると思っています。

今後、山岳部の学生たちが実際の登山で留意すべきことは、安全登山に最大限配慮することは当然のことでありますが、経験が少ないからといって、後ろ向きになってしまうことは残念に思います。自分たちだけで実現が難しければ、経験や能力のあるOB諸氏に助力を求めることも必要です。また、登山研修所の研修会のみならず、各種技術講習会に積極的に参加することもよいと思います。クラブによっては変なプライドや自負心によって、そのようなものに参加することをよしとしない雰囲気があるかもしれませんが、登山技術をはじめ、あらゆる装備、情報には、変遷・進化が伴います。その時代、時代において標準的な活動をしていくことを常に念頭に置いておかなければなりません。少し前の時代では肯定されていたものが否定されていることも、またその逆もあるのです。昔からのクラブのやり方に固執するあまり、知らず知らずのうちに誤った技術を身に付けたまま山に向かうことがあってはなりません。

そして、山行日数が減少している中、学生にとって一つ一つの山行の重要性は相対的に高いものになります。山行計画は不確定要素を極力排除し、その期間において有効な成果が見込めるように、十分な検討が必要です。いわゆるクラッシックルートと言われる剱岳でいえば、六峰フェースから八ツ峰、源治郎尾根など、多くの登山者が訪れるルートにはそれなりのすばらしい要素・理由があります。私は、その中で経験を積むことこそが若い登山者にとって最も重要なことであると考えており、こうした登山はその後の登山人生でも忘れ得ぬ大きな成功体験を実現することにもつながるものです。学生には是非このようなルートを多く登攀し、経験を重ねてほしいと思っています。

早稲田大学山岳部OBで当時部長であった濱野吉生氏は、かつて部報の「リュックサック」の巻頭言として「時に血へどを吐くようなトレーニング、そしてよりよい登山のために考えることを止めてしまうならば、早大山岳部は即刻解体されるべきである」という強い言葉で学生、若手OBを鼓舞しておられます。私もすべての山岳部の学生、若手OBに同じ言葉を贈りたいと思います。

設立50周年を迎えた国立登山研修所の歴史の中で、残念ながら大学リーダー研修会に参加した学生がその後、死亡事故に至ってしまうという事例がいくつかありました。そのことを以って、登山研修所がどこまで大学生の安全登山に寄与してきたかを疑問視する向きが一部にありますが、もしこの研修所がなければ、もっとたくさんの大学生の山岳遭難事故があったかもしれないということは、誰も否定することはできません。

また、昨年、那須岳において大きな事故があり、高校登山部を引率、指導する教職員の方々の知識、技術向上の必要性が登山界の大きな課題として再認識されました。私は以前より、こうした教職員の方々の使命は、意識するとしないとに関わらず、登山を志す高校生のその後の登山人生を左右するかもしれない誠に大きなものであると考えてきました。教職員の方々と同様、大学山岳部の指導にあたる若手OBにも、以前ほどの山行経験なくして止むを得ず学生の指導に当たっている現状があります。

近年、大学生リーダー研修会において参加する学生に、総山行日数が50日に満たない者が散見されます。そのような学生に対し、リーダー研修会として指導することのジレンマは各講師も感じているようです。私は、そのような学生を受け入れることより、以前の半分程度の山行日数、経験でOBになり、学生の指導を行っている方たちへ研修の門戸を開くことが必要ではないかと常々考えてきました。

現役学生を指導する若手OB、教職員の方々共に、上述の通り責任は重く、私はこの両者を対象とする研修会を、これまで通り大学生登山リーダー研修会に加え、今後の登山研修所の事業の柱の一つとすることが、登山界に大きく寄与するものと考えています。

伝統や大学の名を背負って活動することは、学生にとって時に負担になることもあるかもしれません。しかし、何より大多数のOBの温かい気持ちの下、大学の理解も得て山登りができることは、この上なく恵まれた環境であることを自覚し、精一杯の活動をしてほしいと思います。私もこれまでの経験をわずかでも彼らに還元できれば幸いなことであると思っています。